

□「川崎病心血管後遺症の追跡、 管理」に関する研究班

加藤 裕久（久留米大学小児科）

この研究班の目的は川崎病の患児でもっとも問題となる心血管後遺症の病態および長期予後の解明と、治療・管理の指針を作ることにある。初年度の計画として、1)川崎病心血管後遺症の病態に関する研究、2)川崎病における血栓の病態、診断、治療に関する研究、3)川崎病心血管後遺症の病理学的研究、4)外科的治療に関する研究、をあげた。このほか川崎病の治療、管理が実際にどのように行われているかを日本の主な386施設、および米国の220施設にアンケートを送り調査した。また前研究班（班長：川崎富作）の心血管後遺症小委員会（委員長：加藤裕久）が作成した「川崎病心血管後遺症の治療、管理の手引き」の英文版を作成、出版した（Acta Paediatr Jpn 29:109-114, 1987）。

1) 川崎病心血管後遺症の病態に関する研究

日米合同のアンケート調査は米国はロスアンジェルス小児病院循環器科のM. Takahashi 准教授が、日本側は、私がこの研究班の調査研究の一部としておこなった。小児循環器専門医のいる施設を対象としたが、レスポンスは日本が89%とはるかに高く、川崎病に対する関心度が高いためと思われた。また両国の医療費の違いが心エコー図検査や造影検査の回数などに影響しているようにみられる。治療におけるガンマグロブリンやアスピリンの適応や量に関しても両国で多少の考え方の違いがあることが分かった。

心血管後遺症に進展するリスクである巨大冠状動脈瘤について自然歴や予後についての研究では、血栓性閉塞や心筋梗塞に進む可能性が高いことがわかり、特別の管理が必要なが示された（久留米大学）。また、この巨大冠状動脈瘤の発生予測因子の分析ではCRP高値、低年令、血小板の相対的減少、低アルブミン、低ヘマトクリットなどが重要であることが示された（静岡こども病院）。また東京医科歯科大の冠状動脈瘤の発生予測でもほぼ同様の結果が認められた。これらの研究は今後ガンマグロブリンをどのような患者に適応とするかを定める上で参考となる情報である。再造影検査による冠状動脈の狭窄性病変についての研究では発症2年以降に多く見られ、右冠状動脈より左冠状動脈に狭窄性病変の増悪がみられた（国立循環器病センター）。

ドップラー心エコー図による弁逆流の研究では大動脈弁以外の弁で subclinical な弁逆流が従来言われていたより比較的高頻度にみられることが示された。しかし、一方正常小児においても生理的な弁逆流がみられ、どこから病的とするかの問題提起があった（久留米大学）。

2) 血栓の病態、診断、治療に関する研究

冠状動脈瘤が狭窄性病変へと進行する最も重要な要因は血栓形成である。そのため血栓形成に対する病態や診断、治療に関する研究は不可欠である。川崎病における血小板の動態については従来いくつかの検討が見られたが、凝固系、線溶系の検討は少ない。今回、血液凝固阻止物質が検討され急性期の冠

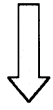
状動脈に拡張のある例に出現することが報告された(産業医大)。この物質がどのような意義があり、川崎病の病態にどのようにかかわっているかは、今後の問題である。冠状動脈瘤内血栓の診断に関してもまだ十分な検討がなされていない。従来、心エコー図やアンヂオにより診断されたが、今回、MRI による血栓の診断の新しい報告がみられる。他の心エコー図などの検査法との優劣については今後検討されなければならない。抗血小板剤を用いても巨大冠状動脈瘤ではしばしば血栓形成が見られる。その際、血栓をウロキナーゼを用いて積極的に溶かし、急性心筋梗塞の治療や虚血性心臓病への進展を防ごうという試みが報告された(久留米大学)。今後、一部の症例では試みられるべき治療法と考えられる。

3) 川崎病心血管病変の病理学的研究

かつて川崎病に罹患し、のちに他の原因で死亡した6例の病理学的検討では5例に血管炎の痕跡と思われる内膜の肥厚などの所見が見られている(東邦大学病理)。これらが今後、動脈硬化性病変へと進展するかは重要な問題で、貴重な報告と思われる。また、死亡例と冠状動脈瘤の大きさの検討では、ほとんどの死亡例が8mm以上の直径の冠状動脈瘤であり、6mm以下の冠状動脈瘤では死亡例が見られなかった(京都大学)。これらのデータは以前に報告された臨床検討と一致するものである。

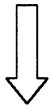
4) 外科的治療に関する研究

外科治療の経験が増加してきている。東京女子医大第二病院より17例の経験が報告された。自己大伏在静脈の長期開存は良好で、経時的に検討するとしだいに拡大する傾向が見られ、成長に対応して適応するのではないかと推論されている。しかし一方、大伏在静脈が瘤状に拡大した例が報告され(東京女子医大心研)、拡大が必ずしも成長に伴う適応とは結論できないとの報告もみられた。また、自己の内胸動脈を用いた3例でグラフトの成長を検討したところ、明らかに患児の成長に伴ったグラフトの長さと同径の増加を認めたとの報告があった(奈良県立医大)。子供の冠状動脈バイパス手術は成人と違い、まだ解決されていない問題が多いが、特にグラフトの成長に関しては内胸動脈の使用が有利であると結論できるようである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



この研究班の目的は川崎病の患児でもっとも問題となる心血管後遺症の病態および長期予後の解明と、治療・管理の指針を作ることにある。初年度の計画として、1)川崎病心血管後遺症の病態に関する研究、2)川崎病における血栓の病態、診断、治療に関する研究、3)川崎病心血管後遺症の病理学的研究、4)外科的治療に関する研究、をあげた。このほか川崎病の治療、管理が実際にどのように行われているかを日本の主な386施設、および米国の220施設にアンケートを送り調査した。また前研究班(班長:川崎富作)の心血管後遺症小委員会(委員長:加藤裕久)が作成した「川崎病心血管後遺症の治療、管理の手引き」の英文版を作成、出版した(Acta Paediatr Jpn 29:109-114,1987)。